

コロンビアの「詩情」 コンテンポラリーアートにおける日本へのまなざし

Takaaki Kumagai

本稿ではキュレターとしてラテンアメリカや日本の美術にかかわってきた経験から、南米コロンビアのコンテンポラリーアートにおける「詩情」というテーマについて考えてみたい。ほんの偶然からコロンビアに住みはじめ5年が経とうとしている。コロンビアといえば麻薬カルテルの抗争、頻発する犯罪、天と地ほど開いた豊富な差など日本ではいまだに否定的なステレオタイプが拭き取られていない。コロンビアは親目的な国である。人々の大半が日本に対してポジティブなイメージ

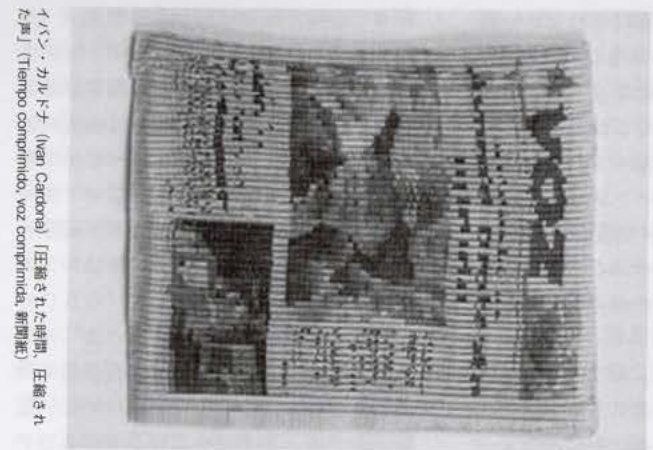
を持つていると言つてよく日本人を前にした外交辞令だという側面を差し引いても、日本の文化的規律や労働倫理を鑑として経済発展を目指すべきだと主張する人に多く出会う。日本がバブル崩壊後の長期化する経済停滞に直面し、少子化や自然災害など出口の見えない数多の問題を抱えるなか、ここコロンビアでは90年代の「旧き良き」日本のイメージがみずみずしく保たれているのである。

一般的な生活感覚に根源があるように思える大半が冷涼で曇りがちなアンデスの山岳地帯に集中するコロンビアの日常風景は、「ただひたすら陽気なラテン系」カルチャーというステレオタイプから大きく逸脱する。とくに標高2600メートルに位置する首都のボゴタは年間を通して天候の変動が激しく、太陽が顔をのぞかせてもすぐに灰色の雲に隠れてしまう。若い世代の相当数がカトリック教会に半ば幻滅した社会で育ち、レイキ、ア

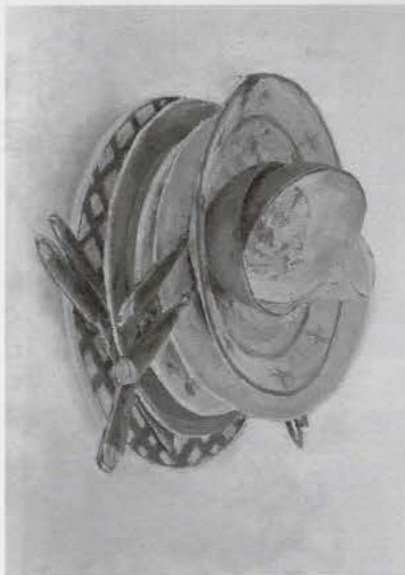
「ユルグエータ」といった「東洋」的な思想や実践への興味が一般化している現在、日本への視線も「ロポット」学など最先端技術への興味に加え、西欧の「神教的なロジックや美学では拾いきれない不可思議な現象への関心と軌を一にしているかのような印象がある。

つているARCO (Artistas Colombianos) ボラリアート展を実施した。コロンビア国内向けの公募によって選出された40作余りの作品が会場を占め、オーニングには多くのアート関係者が来場した。航空輸送の制約上展示されたのは50センチメートル平方以下の平面作品が中心だが、絵画と版画、コラージュなど複数の技法を組み合わせた型破りな作品が多

く、来場者からは「ラテンアメリカのイメージを裏切られとても新鮮だった」「制作の刺激になった」など多くの好意的なコメントをいただいた。



イバン・カルドナ (Ivan Cardona) 「圧縮された時間、圧縮された声」(Tiempo comprimido, voz comprimida, nuevo tiempo)



ルイサ・ベルトラン (Luisa Beltrán) 「日曜日」 (Domingo, 油彩、紙)

はない。賛否両論があるのを承知で私の視点を要約すれば、今回のARCO展では、日常のなかで目にする言語化されにくい、西欧の美学理論では見落とされてしまう未分化な現象や風景などを意欲的に扱った作品が多く、興味深いことになり、日本文化というとしぼしぼは連想される紙という素材を巧みに操作した作品も散見された。彼らが果たして日本での展示を意識してそうした作品に取り組んだのか、それともそれ以前に「日本的」なものの興味がありそのような表現に帰結したのか、単に個人的な背景で制作した結果を偶然ARCOに出展することになったのか、さまざまな推測が可能である。たとえばイバン・カルドナ (Iván Cabrita) の「圧縮された時間」圧縮された声 (「Tiempo comprimido, voz」) の作品はコロンビア最大の日報エル・チエポ (西語で「時間」という意味) と左派系の週刊紙ボス (声) の第一面を、長さ4幅3幅程度の微細な断片に切り刻み、それらを重ねながら再構築したものである。断

片が重複しているため作品全体のサイズはもともとの紙面からはかなり「圧縮」されている。もしこの作品に「日本らしさ」があるとするれば、それは日々印刷されては廃棄される新聞紙という身近な素材への着目や、紙というメディアに着目しながらあたかも日本庭園の「見立て」のごとく縮小する、そうした作家の手づかきを指摘することができるのではないだろうか。それにしても「時間」と「声」を圧縮するというメタメディアはコロンビア出身である作者が東京という文化的他者の土地で展示をするときに不可避的に直面するプロセスなのではないかと考え、興味深い。グローバル化が極点に向かう2010年代後期の日常では通信技術の発達により「時間」が大きく圧縮されているのとは言ってもない。またインタラクティブにおいて「圧縮」という用語は負荷の大きい情報をさまざまな形式等に変換するときによく使われるが、それはものとメディアにある情報をより伝達しやすいつ別の(言語)形式でエンコードすることを意味

なっている。よい哀愁をこめて描いたものである。日曜日という普遍的なテーマを扱いつながら、絵画のほうはコロンビアという土地の日常をみずみずしく伝えている。詩作品が示唆する通りのんびりとした日曜日の、遅めの昼食なのだろう。大きさが不揃いで模様もバラバラな皿、そしてトランプと呼ばれる、飄々するような実の殻を使った容器。これらはまっすぐにコロニアの中流もしくは庶民の食卓を想起させる。そして皿に付着しているトマトソース、様々な方向に差し込まれたスプーンやフォーク。皿洗い機が完備されたアメリカ合衆国の中産階級の家などではこうした場面に目をとめることは稀であらうし、多様な形の小皿を常用する日本の家庭ではこれとはまったく違った場面になるだろう。さりげない日常を際立たせるといふ目的として、絵画の背景が余白であることや、支持体である縦35センチ、横50センチ余りの紙の質感は重要である。こうした瞬間に着目し、ただ過ぎてしまう「日

する。作者による「圧縮」プロセス(切断と再構築)を経たこの作品でも、従来の新聞に書かれていたスペイン語の情報がログの部分をのぞきほぼ完全に解説不能となっており、本来のテクニカルは不可視の情報として埋没させられている。言うまでもなく情報の取捨選択は異文化間コミュニケーションにとって必須のプロセスである。多くの場合内容は「かいつまんだ」上で伝えられるわけではない。この作品は、ほとんどがスペイン語知識のない日本の読者にとって、どのように「時間」や「声」が圧縮されているのかについて、自由に想像を巡らせる快い余白を残したと言えるだろう。日常のさりげない場面への着目という点で、同じARCO展に展示されたルイサ・ベルトラン (西語で「日曜日」(Domingo, 油彩、紙) という絵画は同じ「日曜日」というタイトル

曜日」を不動化するこの作品には、2017年の流行語大賞となった「インスタ映え」、つまり携帯カメラの「ナイスマード」モードでメディアに選ばれた食事や食卓の風景を写真に撮りいち早くSNS上で共有してしまうことは対極の視線がある。写真はいちどSNSに載っけてしまえば億人を超えたとされるインスタグラムユーザーの投稿のなかに埋没しながら、条件反射的な投票行動の対象となり、数日のうちに忘れられる。紙という身近な支持体を使い、いわば非SNSとも言えるワンシームを切り取る試みは、詩作品にこめられた「日曜日」がもつ味わい深い瞬間であって欲しい」という作者の願いと通じ合う。本稿で論じた2作品に限らずコロンビア出身のアートリストの作品には日常のなかに「詩情」を見出すアプロチを比較的好く目にする事ができる。前述したようなコロンビア社会固有の文脈をさらに掘り下げつつ、「詩情」とコンテキストをさらなる考察を重ねてゆきたい。